連載「大友時代を生きた人々」

国際文化学部鹿毛敏夫教授の「徳陽～大内連合政権の対明使節～」が掲載

●大分合同新聞朝刊　2016年8月27日(土)

大友時代を生きた人々

鹿毛　敏夫

今から460年ほど前の天文21（1552）年、西日本に兄弟の戦国大名が並び立つ時代が訪れました。兄は豊後大友家21代当主の大友義鎮（宗麟）、そして弟は義隆没後の周防大内家に養子入りして家督を継いだ大友晴英、後の大内義長です。

大内家は既に義隆の時代に周防・長門・安芸・石見・備後・豊前・筑前の7カ国の守護を兼任。大友家もこの後義鎮が豊後・筑後・肥後など九州6カ国の守護を兼ねます。兄弟合わせて13カ国。日本の戦国時代の中で天文21年から弘治3（1557）年までの5年間は大友＝大内連合という、日本の5分の1を領有するこれまでにない大規模な兄弟戦国大名政権が西国に誕生した時代なのです。

こうした日本国内の情勢は海を越えた隣国にまで伝わります。「明世宗実録」という中国の記録によると、弘治2（1556）年、大友＝大内連合真っただ中の日本に倭寇の取り締まり要求のために訪れた明王朝の使者蒋洲は、最終的にその取り締まりを義鎮と義長の2人に要求しています。

これを受けた弟の義長は大内家に伝来する「日本国王」印鑑を押印した「表」という外交文書を作成し、倭寇に捕らわれていた中国人とともに本国に送り届けています。これは自らが対明外交権を有する「日本国王」資格の継承者であり、かつ現実的にも国内の海賊を統制しうる政治軍事権力者であることをアピールする行動です。

一方、兄の義鎮も「大明副使」として日本を訪れた蒋洲を手厚くもてなし、その帰国に際して明朝皇帝への「表」と貢物を使僧の徳陽に持たせ、蒋洲を護送して中国へ送り届けています。

中国の「日本一鑑」という記録に次のような記述があります。「貢夷徳陽等船一艘、泊於舟山馬墓港、遂館本山道隆観」。義鎮が派遣した徳陽らの船は中国浙江省沿岸の舟山島の西北部に位置する馬墓港に着岸し、徳陽は島中央部の定海という町に移動し、道隆観に滞在しているとの記録です。

道隆観とはかつて定海南部にあった観山という山の麓に立つ道教の寺院です。「定海縣志」によるとその創建は北宋の宣和2（1120）年ですが、現地を訪ねたところ建物は現存せず、「道隆山弄」という地名のみが伝わっています。

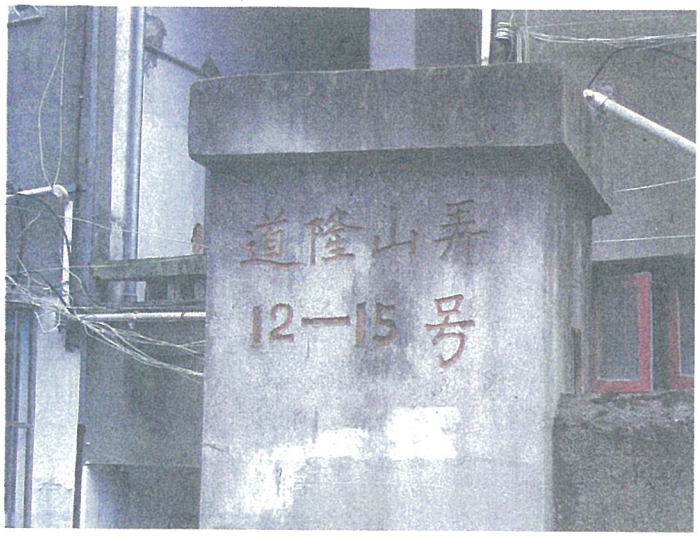
大友＝大内連合政権の使者として中国を訪れた徳陽は、かつてこの場所にあった宗教施設に滞在し、対明外交交渉を行ったのです。

（名古屋学院大学国際文化学部教授、大分市出身）

＝毎月1回掲載＝

大内連合政権の対明使節

徳陽



徳陽が滞在した道隆観の名残を示す「道隆山弄」の地名＝中国浙江省舟山島